シュバイツァー日本友の会　永眠記念会　講演

「輝き」としての生命

～「生への畏敬」を再考する～

土屋　貴志

（大阪市立大学）

1. 三種類の生[命]

「生きている」のは誰か？

- 「私 I」（一人称単数）
- 「彼／彼女／それ[たち] he/she/it/they」（三人称単数／複数）
- 「あなた[たち] you」（二人称単数／複数）

：向き合う人、顔と顔を合わせる相手。「身近な人」であり、「愛する人」「かけがえのない人」である場合もある

（参照：M. ブーバー『我と汝』）

★誰が、誰として「生きている」「もはや生きていない」かによって「生きている」「もはや生きていない」の意義が異なる

2. 生[命]とは？

（「彼／彼女／それ[たち]」の生、客観的に見た「生[命]」）

「彼／彼女／それ[たち]」とは？

- 「彼／彼女／それ[たち]」の存在とは、「私」にとって「その人[たち] 」「第三者」
- 「彼／彼女／それ[たち]」とは、「私」にとってその存在が自分とは距離のある第三者（「他者」）であるという関係を表現している
- 「彼／彼女／それ[たち]」は「私」の観察（「テオーリア」観想、観照）の対象（→ 客観科学）
- 観察するには客観化（自己意識による対象化。自己意識は自己自身を対象化している）が必要
  - したがって、一人称の「私」と三人称の「彼／彼女／それ[たち]」は同時に生成する

「もの」と「こと」は異なる

- 「もの」：物質、物体
- 「こと」：「もの」の性質や働き
- 「こと」は「もの」がなければ存在しない
- <u>生[命]は「もの」ではなく「こと」である</u>

「～である」と「～がある」は別のこと

- 同じ「ある」でも、「～である」(性質や働き) と、「～がある」(存在) はまったく別のこと
- 「～である」(性質や働き) は、その性質を持つ、ないし、そう働くものごとが存在することが前提
- 存在しないものごとについて「～である」を言うことはできない（「実存［存在］は本質［性質］に先立つ」サルトル）

「～でない」と「～がない」も別のこと

- 同じ「ない」でも「～でない」(特定の性質や働きの否定) と「～がない」(存在の否定) も、まったく別のこと
- 「～でない」(特定の性質や働きの否定) は、その性質や働きをもたないものごとが存在することを前提にしている
- そのものごとが存在しなければ「～でない」を言うことはできない
- 性質や働きは、そのものごとが存在していることが前提になっている

生[命]は身体の働き(活動)である

- 生物体（生きもの）と生[命]（生きていること）とは異なる
- 生[命]は「こと」：物質からなる生物体（「もの」）の働き(活動)
- 生物体（生きもの）がもはや働かなく(活動しなく)なるほどに損なわれれば、生[命]という働きもなくなる（＝死ぬ）
- 生物体が生[命]という働きを失った（もはや働かなくなった）ときが死である

「輝き」としての働き(活動)

- 音楽の演奏、舞踊や演劇やスポーツの「パフォーマンス」、花火のきらめきなどは、働き(活動)
- それは、二度とない、一回限りの、「かけがえのない」こと
- 生[命]とは、身体が働いている（活動している）こと
- 生[命]という「もの」(生物、生命体) が輝くのではない。<u>生[命]それ自体が働き(活動)であり「輝き」である</u>

魂は存在しない

- 生[命]は生物体の働き(活動)だから、生物体を離れて生[命]は存在しない
- 生物体とは別に、生[命]（「生気」「魂」）があるわけではない
- 心は、生物体の働きの一つ。したがって、生物体を離れて心はありえないし、生物体が死ねば心もなくなる

★これ以降は、生[命] は「こと」であるという点を明確にするため、「もの」であるという誤解を招きやすい「生命」という言葉は用いず、もっぱら「生」という言葉を用いる

心（精神）としての魂？

「魂とは心（精神）であり、身体とは別に存在する。

　魂は受精（受胎）以前から存在し、身体が死んでも魂は生き続ける」

という、根強い考えは、<u>誤り</u>

：身体とは別に（心ないし精神としての）魂が存在するのなら、なぜ身体の状態が魂（心、精神）に影響するのか？

生きていることは単なる事実

- 客観的（科学的）に見れば、生きていることは「ただ生きている」こと以外の何ものでもない
- 生きていることは、ただそうであるというだけのこと
- 生き物がいま生きているのは、（たまたま）生まれてきて、（たまたま）これまで死ぬような目に遭っていないからにすぎない

生きていること自体はプラスでもマイナスでもない

- 客観的に見れば、生きていること自体には、プラスの価値もマイナスの価値もない
- 生きていること自体が、それだけで、「尊い」「尊厳がある」わけでも、価値があるわけでもない
- また、生きていること自体が、それだけで、「生きるに値しない」ということもない

「こと」も「もの」も、それ自体で価値を帯びることはない

- 客観科学は価値づけをしない
- 価値を付与するのは生きている［意識ある］主体
- 生きている［意識ある］主体が全く存在しなければ、どんな「こと」にも「もの」にも、価値は一切付かない（プラスも、マイナスも）

3.「私」の生

生きているのはなぜ「尊い」のか

- 生きていることは、ただそうであるということにすぎない。なのに、なぜ、生きていることは「尊い」「価値のある」ことになるのか？
- それは、私たちが生きているからであり、生きていることしか考えられないから
- だからこそ、生を「肯定」したい

（V. E. フランクル『にもかかわらず生を肯定する… trotzdem Ja zum Leben sagen』＝邦訳タイトル『夜と霧』）

「私」とは？

- 「私」とは、体感を伴って「これ」と名指しされる身心の状態
- 「あれ」でも「それ」でもなく、「これ」「この」身心。体感されている身心

＊「私たち」(一人称複数) とは「私＋あなた[たち]」のこと

「私」が生きているとは？

- 「私」の生とは「私」という体感的な意識

（自己意識＝意識についての意識）

- 「私」の死とは自己意識の喪失
- 自己意識が失われれば、「私」からみた、「私」にとっての世界は存在しなくなる
- 脳ができる前の胚のとき「私」はまだ生き始めておらず、「脳死状態」に陥れば「私」はもう死んでいるのかもしれない

死とは生の不存在である

- 「死んでいる」こと（「もはや生きていない」こと）、および「生まれていない」こと（「まだ生きていない」こと）は、いずれも「生が存在しない」ということである
- 生きている「私」にとって、自分が「存在している」とは、生を経験していることにほかならない

生きていない事態は知り得ない

- 生きていない（生まれていない、死んでいる）事態は、私たちの体験し得ない、知り得ないこと
- 死んでいることは体験しえない
  - 死んでいくこと＝死ぬこと＝生きているのが終わっていくこと、は途中まで体験できる。しかし、体験し終えたときには、他の人に伝えることができなくなっている

死は知り得ない

- 死は、単に、生が存在しないこと、生きていないこと
- 生を経験しているもの（＝「私たち」すべて）にとって、自分の死は経験しようがなく、知り得ない
- 死んだときには、死んだとわからない

「死はわれわれにとって何ものでもない。［中略］われわれが存するかぎり、死は現に存せず、死が現に存するときには、もはやわれわれは存しないからである」(エピクロス『メノイケウス宛の手紙』124-125)

生きている以外のありようがない

- 私たちは、生きている以外のありようをすることができない
- 死んでいる、生まれていない、という事態を体験することは不可能
- 生きているということの「外側」に出ることはできない
- たとえ、死んでいるとか生まれていないとかいう事態を想像しても、その想像内容の真偽は確かめようがない

生まれかた・死にかたは選べない

- 生まれかたを選ぶことはできない
  - 気づいたときには「生まれている」
- 死にかたも選ぶことはできない
  - 生体が死ぬのは物理的現象。身体を壊す「外力」で死ぬ。厳密な意味で「自分自身の力（自力）で死ぬ」ことはできない
  - 死にゆくときの身体の反応は自分で制御できない
  - 本当に死ぬときには、意識のほうが先になくなっている。死んでいくことを最後まで意識し観察することはできない。いわば「いつのまにか死んだ・死んでいる」のだが、本人はもはやそのことに気づくこともない

なぜ死を恐れるのか

死んだときにはもはや私たちは存在せず何も経験しないのなら、死を恐れる必要もないはず。なのに、なぜ、私たちは死を恐れるのか？

- それは、私たちが生きているから
  - 死ぬ（死んでいく）とは、生きていなくなるということ
  - 死んだ（すでに死んでいる）とは、もはや生きていないということ
- 生きている私たちにとって、生きていなくなる／生きていないということは、自分がいなくなる／いないということであり、そのこと自体がしばしば耐えがたく、恐ろしい

生しか経験できない

- 意識ある生物体が経験するのが「私としての生」である
- 生きていなければ経験はない。死ねば経験する主体が存在しなくなっている
- 死んでいることを経験することはできない。私たちが経験できるのは生だけ
- 「私」は、働き(活動)がもはや維持できないほど身体が損なわれ死ぬ瞬間まで、<u>自分は死なず生き続けると思っている</u>
- それゆえ、死なない「魂」を想定してしまう

3-1. 自殺について

自殺容認論を反駁する

- 実際の自殺の多くは、うつ状態から起こっている
- うつ状態で自殺をしようとする人は、自殺する理由を問われても答えられないし、理由の検討など行わないだろう
- 以下の検討はあくまで《人には「生きる権利」があるのと同様に「死ぬ権利」もある》《自殺してもよい正当な理由がある》といった考え（自殺容認論）を公言する人々に向けられている

「自死」「自殺」「自決」とは？

- 自分の身体を壊す「外力」（物理的な力）を、自分で招くことはできる
  - 投身、縊首、服毒、自傷、…
- それでも、死んでいく過程自体は制御できない

「ただ生きる」は「よく生きる」の対義語ではない

- 「ただ生きるのではなく、よく生きるべき」（ソクラテス以来の伝統的思想？）
- だからといって「ただ生きる」ことがわるいわけではない。「ただ生きる」よりも「よく生きる」ほうがよいと比較しているだけ
- 「よく生きる」の反対語は「わるく生きる」であり、「ただ生きる」ではない

→「ただ生きているだけなら意味がなく死んだほうがまし」という言明は誤り

- 生きること自体は「よく（わるく）生きる」ための必要条件。生きていなければ、よく生きることもわるく生きることもありえない

「死にたい」とはどういうことか

- 「死にたい」というのは、「南極点に行ってみたい」等のように「死んでみたい」「死を経験してみたい」という意味ではありえない

←死んだら、死ぬことを経験した主体はなくなっており、後戻りもできない

- 「もうこんなのは耐えられない」「つらすぎる」「もういやだ」ということが多い

→いくらでも、そう叫んでよい。「つらい」「もういやだ」「耐えられない」と言いまくってよい　＊安楽死登録もその一つの表現

- 「死にたい」とは、多くの場合、本当に「死にたい」のではない。「このつらさやしんどさから解放されたい」ということ

死んで楽になることはない

- 死そのもの（死んだこと、死んでいること）は経験できない
- 死んだときには、苦痛からの解放を経験する主体がない
- したがって「死んだら楽になれる」ということはありえない
  - 「楽」であることを経験する主体がない
  - 苦痛から解放されたことも経験できない（経験できるのなら生きているはず）

死は眠りでも休息でもない

- 死ぬことは「眠り」でも「休息」でもありえない
  - 眠っている時も、身心はさまざまなことを感じており、体感はある。自己意識が休んでいるだけ
    - 夢を見ていれば自己意識も活動している
- 死ねば、眠ったり休んだりする主体そのものがなくなる
- 死は「シャットダウン」であり、「スリープ」ではない

なぜ「死んだら楽になれる」と考えるのか？

- 「死んだら楽になれる」と考えるのは、苦痛から解放され「楽になった私」が、死んだ後に存在すると考えているから
- しかし、死んだらそもそも「私」が存在しなくなっている
- 死後も「私」が存在していると考えるのは、まさしく、私たちは「私が生きている」以外のことは考えられないことを示している

「死んだほうがよい」ということはない

1.「とにかくこの苦しみから解放されて楽になりたい」（現在の苦痛から逃れたい）

→ 死んでも楽になれない（楽になれるという信念は偽である）

2.「これから来る苦しみや『生き恥をさらす』ことを回避したい」（未来の苦痛を回避したい）

→ 予想している苦痛や「生き恥」はそれほどひどくないかも（予想は間違っている）

- 本当に苦しいときは苦痛に対処するのに精一杯で、苦しいこと自体を悲観したりする余裕はない
- 「生き恥をさらす」のは惨めなことではなく、恐れなくていい（そうやって生きている人たちがおり、それを「恥」と見るのは偏見、公言するならヘイトスピーチ）

苦痛の予想にどう対処すべきか

- 非常に大きな痛みや苦しみを経験すると予想され、恐ろしくてたまらないことがある
- しかしまだ、その痛みや苦しみの体験が実際にどのようなものなのかはわかっていない
- 予想は、当たるという保証も、当たらないという保証もない。予想が当たっていたかどうかは、経験してみて初めてわかる
- 予想が外れたなら「運がよかった」ことになる。予想通り非常に大きな苦痛を経験することになったら、その時は「つらい、苦しい」と叫べばよい
- 外れるかもしれない予想に基づいて生きるのをやめるのは早計。恐れに従わなくてもよい

「自分の存在を消したい」

苦しみからの解放や苦しみの回避だけではなく、「自分がいなくなりたい（自分という存在をこの世界から消したい）」という理由から自殺や自死を望むことはある

…これに対しては、

- 「いなくなりたい」と思えるのも、生きて（存在して）いるからだよ。最初から[生きて]いなければ、いなくなりたいと思うこともできないんだよ

ということくらいしか言えない

「自殺」「自死」他にありうる理由？

- できることを証明したい欲求があるかも
- やったらどうなるか試したい好奇心もあるかも
- でも、やってしまったら（やり直すための主体がなくなり）やり直せない、ということを十分に理解していない場合が多そう
- あるいは、多少理解した上で、取り戻せないダメージを他人に与え、自分が存在したことを刻印しようとすることもあるかも

4.「あなた[たち]」の生

「あなた[たち]」とは？

- 「私」と「顔と顔を向き合わせる関係」にある
  - 私が「あなた」と呼びかけても、あなたにとって私は「彼／彼女」でしかないこともありうる
  - 互いに「顔と顔を向き合わせる関係」であれば、「愛する人」「かけがえのない人」になり、両者は「私たち」になる
- その存在は身体を通して知られる
  - 身体が働いて(活動して)いる限り存在する（例：「脳死体」）
- 意識の働きによる原初的関係から発する
  - 自己意識の生成とともに、「私」と「彼／彼女／それ[たち]」と「あなた[たち]」が、同時に対象化されて成立する

生[命]は失われたのに…

- 身体がもはや働かない(活動できない)ほどに損なわれれば、働き(活動)である生[命]は失われ、存在しなくなる
- にもかかわらず私たちは、「あなた[たち]」と呼びかける大切な人[たち]が、亡くなった後もどこかに存在し続けていてほしい、と願ってしまう（それほど「大切」）
- それは「魂」の存在、およびその不死を信じるに至る動機になる

5. シュバイツァー「生への畏敬」を再考する

「文化哲学」としての「生への畏敬」

- 「文化とは個人と集合体との進歩、物質的精神的進歩である」（『文化の頽廃と再建（文化哲学第一部）』国松孝二訳、『シュヴァイツァー選集』第6巻、白水社、1962年［原著1923年］、p.176）
- 「進歩とは［中略］個人にとっても集合体にとっても、生存競争がよわまるということである」（同上）
- 「生存競争がよわまるためには、理性が自然と人間の本性とを、最大限に、もっとも目的にかなうように、ひろく支配することが必要である」（同、pp.176-177）

理性による人間の志向の支配

- 「文化はその本質上二面的である。それは理性が自然を支配するとともに、人間の志向をも支配することによって実現される。

　この二つの進歩のうち、どちらが大事であるか。それは目だたないほうの進歩、すなわち、理性が人間の志向を支配することである」（同、p.177 ）
- 「理性が人間の志向を支配するということは［中略］個人と集合体がその意志を、全体や多くの人びとの物質上精神上の幸福によって規定されること、すなわち、個人と集合体が倫理的になることである」（同上）

倫理の重要性

- 「真の現実感覚は、わたしたちが倫理的な理性理想によってはじめて、現実と正常な関係にはいるのだということを見抜くことである」（同、p.194）
- 「倫理的な文化概念だけが正しい」（同、p.195）
- 「倫理的精神の力にたいする絶大な信頼が必要である」（同、pp.196-197）
- 「［文化の革新の］運動のにない手となるのが、個々の個人だけにかぎられている」（同、p.203）

文化の再生は世界観の革新による

- 「文化が世界観を基盤としており、多くの人びとの精神的覚醒と倫理的意欲がなければよみがえらない」（同、p.206）
- 「わたしたちが文化世界観をとりもどして、そこから文化的志向を生み出すことさえできれば、文化は再建される」（同、p.207）
- 「精神の大きな課題は、世界観をつくることである」（同上）

世界観とは

- 「世界観とは［中略］社会と個人が、世界の本質ならびに目的について、世界における人類と人間の位置ならびに使命について、いだいている思想の総体である」（同、p.207）
- 「世界観は思考する世界観でなければならない」（同、p.211）
- 「考えぬかれた思考は［中略］すべての人間にとって思惟必然的な生きた神秘主義に帰着する」（同、p.215）

楽観論的倫理的世界観

- 「思考する世界観は［中略］楽観論的倫理的でなければならない」（同、p.216）
- 「楽観論的世界観とは、存在を無よりも高く評価し、したがって世界と生とをそれ自身価値あるものとして肯定する世界観である」（同、p.216）
- 「倫理とは、自己の人格の内面的完成をめざす人間の活動である」（同上）

世界と生の肯定

- 「倫理は、それが世界と生とを肯定する世界観のなかにあらわれると、［中略］個人が内面的に自己を完成すると同時に、人間と世界とに働きかけることが、倫理の目標となってくる」（同、p.217）
- 「わたしたちは世界と生の肯定を、それ自身必然的な、価値あるものとして、体験している」（同、p.223）
- 「世界と生の肯定は、わたしたちの生への意志のなかに与えられている」（同上）

「生きようとする生命」

- 「真の哲学は、最も直接的で最も包括的な意識の事実から出発しなければならぬ。すなわち『わたしは、生きようとする生命にとりかこまれた生きようとする生命である』という事実である」（『文化と倫理（文化哲学第二部』氷上英廣訳『シュヴァイツァー選集』白水社、1962年［原著1923年］、第7巻 pp.279-280）

「生きようとする意志」

- 「わたしの生きようとする意志のなかには、生きつづけようとするあこがれ、意志の神秘的高揚状態へのあこがれがあって快楽と呼ばれ、生きようとする意志の破壊と神秘的な損傷に対する恐怖があって苦痛と呼ばれるが、そうしたものはまた、わたしを取り巻く生きようとする意志のなかにも、たとえわたしに対して声を発しようが発しまいが、存在する」（同、p.280）

「生への畏敬」の倫理

- 「それゆえ倫理は、わたしが、自己の生に対すると同様な生への畏敬をすべての生きようとする意志にささげたいという要求を体験することにある。これによって、道徳の根本原理は与えられたのである。すなわち生を保持し、生を促進するのは善であり、生を破壊し、生を阻害するのは悪である」（同、p.280）

「生への畏敬」の世界観

- 「『生への畏敬』の世界観は、現実世界をそのあるがままに見る。［中略］『生への畏敬』は、あらゆる世界全体の客観的認識とは縁のない、一つの対世界の精神的態度を、われらに与える。［中略］われらが世界に関係するのは、認識によってではない。体験によってである」（『わが生活と思想より』竹山道雄訳、白水Uブックス、2011年［原著1931年］ pp.236-237）
- 「神秘主義が深い世界観であるのは、それが、人間をして無限に対して深い関係を持たしめるゆえである。『生への畏敬』の世界観は倫理的神秘主義である」（同 p.277）

生命の間に価値の差はない

- 「『生への畏敬』の倫理について人が特に奇異とするのは、この思想が、高い生命といやしい生命、価値ある生命と無価値の生命のあいだに何の差別もつけない、というにある」（同、p.274）
- 「真に倫理的な人間にとっては、あらゆる生命が神聖なものである。［中略］生命のあいだの差別をつけるのは、必然性によって強制される場合のみである。すなわち、二つの生命のうちいっぽうを救うには、いずれかのいっぽうを犠牲にするの止むを得ない、場合に限るのである」（同、p.275）

しかし、他の生命を殺さなければ生きていけない

- 「生命を破壊し生命を毀傷する必然性がわたしには課せられている」（『文化と倫理』氷上英廣訳p.288）
- 「通常の倫理は妥協を求める。［中略］生への畏敬の倫理は、なんら相対的倫理を承認しない。［中略］この倫理は人間のために葛藤を処理することをしない。かえって人間に迫って、どこまでかれが倫理的でありうるか［中略］自己自身で決断せしめる」（同、p.289）

- 「わたしがなにかの生命を損傷する場合、それがやむをえないかどうかを、はっきり知っていなければならぬ。一見とるにたらぬようなものでも、不可避的なもの以上に出ることをしてはならない」（同、p.290）
- 「人類のために［動物実験などで］かかる犠牲を一動物に課するという必然性が果たしてあるかどうかを、個々のケースについて、考慮したうえでなければならぬ。また、できうるかぎり苦痛を軽減するようにこまかく心づかいしなければならぬ」（同上）

シュバイツァーの「生[命]」とは？

- シュバイツァーの「生[命]」を、「もの(生物、生命体)」ではなく、生命体の「働き(活動)」としての「こと」として捉えてみる
- すると、「生きようとする生命」「生への意志」とは、生物(生命体)が、働いて(活動して)おり、働き(活動し)続けようとしていること、と解釈できる

「生きようとする生[命]」とは？

- 生[命]とは、生きるという働き(活動)
- 生物(生命体)は「生」の働き(活動)として、生き[てい]ることしか意識できない（死は知り得ない）。生きていることの「外側」に出ることも、生きていることを自力で止めることも、できない
- 生物(生命体) は、その働き(活動)がもはや維持できないほど損なわれ死ぬまで、自分は死なず生き続けると思っている